

新譜月評 The Record Geijutsu 器楽曲

青柳いづみ/ドビュッシーの時間



特選盤

①(忘れられていた)映像より(レント/いやな天気だから、もう森に行かない)の諸相②版画③練習曲集(全曲)青柳いづみ(p)[カメラータ]CMCD28160 ¥2940

CD 30

この演奏も、そこで存分に頭脳が働いているにせよ、けつし理詰めには陥っていない。感性の鋭さ、柔軟さ。それは《版画》ほか先立つ曲目のうちにもみなぎっている。たとえ著作家としての彼女を知らず、先入観なしでこのCDを聴く人びとの耳にも、そのことは十全に伝わるに違いない。何もこだわった言い方をする必要などないのだが、音楽家青柳いづみこは、何をいってもまず音楽家にほかならない。

那須田務 Tsutomu Nasuda

推薦 このアルバムの主題は、ピアニスト自身がライナー・ノーツに寄せたエッセイによれば、ドビュッシー自身の語る音楽観、「色彩と律動づけられた時間」としての音楽である。《忘れられていた》映像からのレント(ゆっくり)と《く》で始まり、《いやな天気だから、もう森に行かない》の諸相を経て、《版画》でゆっくりと、「ドビュッシーの時間」の核心へと近づいていく。なぜ《練習曲集》なのか。その理由は「音楽とは色彩と律動づけられた時間」が最も高度なレヴェルで実現されている」から。

和音の響きが濁っていて暗い印象を受けるのは、調律の問題か、弾き手の好みか。それはともかく、その演奏は青柳ならではの、知的で重厚なもの。《レント》は両手でそつとピアノから音を解放するかのようにならされるのだが、それは、アルバム全体の脈略のなかで実に印象的だ。そして、濃密な霧のような湿った情感が、音楽に生き物のような温もりを与えている。《もう森に行かない》の諸相の決然としたリズムや畳み掛けるような演奏が、原曲の童謡のタイトルとは裏腹に、次のシーンへの聴き手の関心を高めている。ドビュッシーは印象派ではなく象徴主義だというのは今や定説だが、この《版画》を聴けば、やはり響きの画家なのだと思う。青柳の筆遣いはまさに円熟の境地。アルバム全体の完成性と独創性が与えられている。そして《練習曲集》は、フランスの言葉や文化(とくにベル・エポック期)を背景と

した、豊かな趣味を感じさせる。

相澤昭八郎 Shohachiro Aizawa

「録音評」選曲と奏者の個性を重ね合わせて、特徴の際立ったサウンドを想像したが、思ったよりオーソドックスな印象だった。音の距離感、音像の大きさ、拡がり、音場プレゼンスなどいずれも正統的なピアノ録音の基本にそっている。音色は強奏の中・高音がややメタリックなのに、太めで暖色の低音が対照的で面白い。2007年7、9月、三重県総合文化センター。〈90〉

新譜月評 The Record Geijutsu 器楽曲

内藤晃/プリマヴェエラ



特選盤

[D.スカルラッティ:ソナタK.87/同:同K.380/モーツァルト:ピアノ・ソナタ第10番/スクリャーピン:ピアノ・ソナタ第4番/メトネル:春/ショパン:舟歌Op.60,他(全9曲)](詳細は巻末新譜一覧表参照)内藤晃(p)[ティートックレコース]XQDN1011 ¥2800

濱田滋郎 Jiro Hamada

推薦 内藤晃というピアニストのことは、不束ながら、このCDをもって初めて知った。まだ23歳の彼は、現在も東京

外国語大学ドイツ語科に籍を置かれた桐朋音大で指揮法を学んでいるとか。また、少年時代から毎年、老人ホーム、福祉施設を訪ねて演奏することをつけており、その方面で賞を授けられてもいるという。念のため明記すれば、私はいつものとおりブックレット解説は二の次としてまずは演奏そのものに耳を傾け、右のことはあくまで後に知ったのだが、

あきらかにこの演奏には、人柄の反映が濃く、と聴きながら感じた。すなわち、このCDには、コンクール目当てに腕ばかりを磨いてきたピアノリストからはけつして聴かれない、内から発する「言葉」がみなぎっているのである。選曲からして、これはあくまで、いま自分が弾きたい作品、自分なりに作曲家それぞれが込めた「声」を聴き届けたい作品ばかりを選んだに違いない、と思わせるものがある。言い替えば、ここに選ばれた18世紀から20世紀までの曲目は、「詩的余韻の豊かさ」において共通している。だから、ほとんど脈絡なく並べられたように見えて、あるロジックを、ある「流れ」を感じさせる。これにちなんで、ぜひ一筆せねばならないのは、ピアノリストの選んだピアノがベヒシュタインであること。彼の世界を創るために、このピアノの響きが必須であろうことは、理屈抜きで伝わってくる。最後のショパン《舟歌》のみはライブ録音となっているが、同じくピアノはベヒシュタイン。そして、「言葉」に満ちてはいても、けつして雄弁にはなりすぎない内藤晃の流儀は、たしかにこの名作の真髄に触れ得ている（ひとこと。最後の音が鳴るなり「プラーウオ」を叫んだ人、あなたは本当にこの演奏に打たれたのだろうか？）。

那須田務 ● *Tsutomu Nasuda*

**推薦** 若い音楽家の台頭が目覚ましい。内藤晃は1985年生まれだから、今年で23歳。栄光学園高校のときに、日本クラシック音楽コンクール高校部の全国最高位を得て、現在東京外国語大学のドイツ語学科に通う傍ら、桐朋学園大学で指揮の研鑽を積んでいるという。スカラルラッティ、モーツァルトからロマン派、近現代までを並べた、いわゆるリサイタル・プログラム。スカラルラッティとモーツァルトのタッチはよく研磨され、粒立ちが揃ってとても美しい。いや、それ以上に音にスピリットがあるのがいい。ピアノリストの感じたものが、音や演奏からダイレクトに伝わってくるのだ。ス

カルラッティの《ソナタ》ロ短調L33に込められた哀愁は色濃く、ホ長調L23はメリハリのきいた鋭角的なリズムが楽しい。モーツァルトの《ソナタ》ハ長調K330の第1楽章は引き締まったテンポ、熱気が籠もったパッセージと微妙に施されたアゴギックが、演奏に生きた表情を与えている。隅々まで楽曲を理解した上での演奏であることを示唆する明晰さを持ちながら、同時に作品の内面と一体化した純粋な表現は聴き手を惹きつけてやまない。第2楽章では十分なテクスチュアの透明度を伴いつつ、余分なものをそぎ落としたシンパルな歌を聴かせ、終楽章は生き生きと弾む。モンボウの《歌と踊り》第6番の哀愁には胸に迫るものがあり、後半では若い情熱を思い切り解き放つ。フォーレの《即興曲》は歌に溢れ、スクリヤービンの《ソナタ》第4番では繊細かつ詩的な感受性が認められる。メトネルの《春》の艶やかな色彩感と濃密な情念は、まさしく春の息吹きそのものだ。これにより一層の洗練とスケールの大きさが加われば、インターナショナルな舞台で活躍するアーティストとなることは間違いない。

若林駿介 ● *Shunsuke Wakabayashi*

**録音評** ショパンの《舟歌》のみは2007年の5月の、東京・杉並公会堂大ホールでのライブ・レコーディング、他の8曲は2007年の10月に、東京・東大和市民会館（ハミングホール）で録音されたもの。

左右両スピーカー・システムの中央域に、小幅に定位させたピアノ録音。

音のとけあいは良好。音の減衰までもクリアにとらえられている。

〈90〉

新譜月評 The Record Collection 器楽曲

■ J・S・バッハ&C・P・E・バッハ/鍵盤作品集

濱田滋郎 ● *Ivo Hamada*

特選盤



[C.P.E.バッハ組曲Wq.62-12, H.66/J.S.バッハイタリア風アリアと変奏BWV989/C.P.E.バッハ幻想曲Wq.59-6, H.284, 他(全6曲)]  
 (詳細は巻末新譜一覧表参照)  
 ジョスリーヌ・キューエ(クラヴィコード)  
 [フーガ・リベラ◎MFUG508]  
 ¥2940

**推薦** クラヴィコードは、たしかに音量には乏しい。しかし、名手による演奏を間近に聴く機会さえ得られるなら、誰でもこの楽器が最もし出す絶妙な美の世界に打たれるはずである。そう知るにつけ、クラヴィコードほど、レコードによって聴くべき、楽器はないように思われるのだが、実際には昔も今も、この録音は多くない。楽器そのもの、ふさわしい環境そして演奏者、条件が揃わないと、満足できるディスクはなかなかできない、ということなのだろうか。幸いにもここに聴く、フランスのチェンバロ/クラヴィコード奏者ジョスリーヌ・キューエによるバッハ父子作品集は、数々の条件をすべて満たして非常にすばらしい。ナント音楽院教授である彼女はH・ドレフュス、L・ブレイに学んだというが、古楽を志す以前にピアノを習った師はなんとサンソン・フランソワだったとのこと。選曲はJ・S・バッハ作品から《イタリア風アリアと変奏》イ短調BWV989、《前奏曲(幻想曲)》イ短調BWV922、《組曲》イ短調996(いわゆる「リュート組曲」で、この調性は本来ならホ短調。おそらくここでは効果を考慮し4度高く移調した版を用いたのだろう)。C・P・E・バッハ作品から《組曲》ホ短調《幻想曲》ハ長調《スベインのフォリア》による12の変奏。以上、いずれもクラヴィコードによる演奏にふさわしい、繊細かつ多感な趣の楽想を持つ作品が揃えられている。使用楽器は(詳細は省くが)発音方法の異なる2種のレプリカで、曲